市長賞

オレンジのおにぎり

松岡　望

のり

バサバサと音がして、白いサギが飛んでいった。家の目の前の海は、今日も穏やかで、太陽の光をちらちらと光らせていた。そして海の中から細い電柱みたいな木の棒が生えている。そこに揺蕩(たゆた)うのは黒く濃い、海の栄養を蓄えた海苔たち。いろはは口から出た白い息を手に包み、作業場に急いだ。

「もう始まっとるで。急ぎい。」

とれたての海苔を洗っていた母に言われてさらに急ぐ。海に近づけば近づくほど、海苔の匂いが鼻に入ってくる。この匂いがたまらなく好きだ。作業着をもんぺの上から着て、海に入る。ゴム製の服と言えど、一月の海の水温は氷に触れるよりも冷たい。一瞬でも素足で浸かればたちまちピクリとも動かなくなる。足を滑らせて落ちるなど、考えられないほど恐ろしい。ざぶざぶと水をかき分け、養殖場に入る。入るとすぐに、

「とろい。はようこい。」

と、しわがれた声が聞こえてきた。御歳八十五歳。海苔業一筋のウタおばあちゃん。この歳になっても、ど

こも悪くならない。それどころか、私ですら足を取られてしまうような荒い波でも平気で海に入る。出兵して行方知れずになった父に代わって、家長になり家を支えている。

「ごめんねぇ、いっぱい働くけえ。」

私が言うと、ばあちゃんは桶を滑らせてよこした。

「今年も、おてんとさまいっぺえ浴びとるけぇ、ええ色出とる。」

「ほんとじゃぁ。」

海苔摘みはまだ三年目だけど、だんだん分かってきた。濃く深い紫色、これはいい海苔の証拠。海の栄養をたっぷり吸って、日の光をたくさん浴びた海苔。丁寧に、一つずつ摘んでいく。あっという間に、桶の底が見えないくらいになった。太陽もしっかり上がり、日に当たっている背中はぽかぽかと暖かい。

ばあちゃんと一緒に陸に上がると、六歳になったばかりのいとが駆け寄ってきた。

「のりさんようけとれた？」

「とれたよ。ほれ。」

「うわあ。もじゃもじゃじゃぁ。」

桶を覗き込みながら、いとが言う。作業場から顔を出したばあちゃんが笑って見ている。

「ほれ、はよぉ抄(す)きんさい。」

私は作業場に入り、とってきた海苔をわしゃわしゃと洗い、大きな樽に移し替える。専用の枡に海苔を入れ、型を乗せた簾(すだれ)に流し込む。水を切って、また次の簾に海苔を流し込む。これを何回も繰り返すと、大量の海苔が出来上がる。これを、大きな簾に括り付けて稲刈りの終わった田んぼに並べる。そして、乾燥させて、海苔ができる。普通なら。

そう、私の家、楠(くすの)家は普通の海苔作りとは少し違う。そこまでは、去年ばあちゃんに教えてもらった。けれど、乾かす途中で風邪をこじらせたため、その先を教えてもらっていない。だから、その作業ができるのが楽

しみで仕方ない。
やがて立春を過ぎ、雪を過ぎ、栄養豊富な雪解け水が海に流れ出す頃、海苔摘みは大詰めを迎えた。そして今日、楠家伝統の最終過程を行なう日だ。朝一で、箱屋から大量のアルミの箱と木箱が送られてきた。これから何をするのだろう、気になって仕方がなかった。
「ほれ、こっちに来んさい。」
と、ばあちゃんに言われ、家の敷地にある地上二階地下二階の蔵に入る。そこで、ばあちゃんは簾に張り付いた海苔を丁寧にはがし、和紙を入れたアルミの箱に入れていく。そしてそれをぴったりはまる木箱に入れる。最後に風呂敷で包んだ。手招きされて、見よう見まねでやってみる。風呂敷包みが二十個ほどできるとばあちゃんは一九三〇と書かれた棚にしまった。
「これからこの海苔たちはようけ長い眠りにつくんじゃ。」
「ようけ長くて、どのくれえなん？」
「百年くれえじゃ。」
「ひゃく」
驚いて大きな声を出した。声は蔵の壁にこだまして消えた。
「そけぇね。いろんなふうに変わる世の空気を吸って、百年後、いろはのこども、孫、ひ孫たちの口に入るんじゃ。」
「え、じゃあ、ここに置いてあるんはもうずうっと前からあるってこと？」
「そけ。大正明治…江戸の時代のもある。わしらが食べよる海苔も、おおかた百年前に作られたもんじゃ。」
四面いっぱいに綺麗に並んだ風呂敷が四階分。その一つ一つを見るようにしてばあちゃんは言う。
「未来のこたぁ誰にも分からん。これからも火事やら嵐やらいっぺえある。いつなくなるかも分からない。けど、代々受け継いで作ってきた人たちの魂は残り続ける。食べられた海苔の魂は、食べた人に憑いて、悪いこ

とや苦しいことを取り払う。そうやって、ずうっと食べられてきて守られてきたんだ。じゃけぇ、うちらもこうやって海苔を作る。そいで最後、海苔に魂を入れる。」

いつの間にかお母さんが横に立っていた。優しい笑顔で、海苔をじっと見る。

「いろは。前を向きんさい。」

言われて、今棚に入れた海苔の包みを見る。

「海苔たちに、自分の思いを入れるんよ。」

言うとばあちゃんは目を瞑った。私も、目を瞑って考える。

――百年先なんて到底分からないけど、でも、きっとこの海苔を食べる人は優しくて、愛情があって、大切にする人かもしれない。そういう人であってほしいな。私たちのいろんな空気を吸った海苔はどんな味なのかな。美味しかったら、いいな。無事に、百年先の人の口に入ってほしいな。――

親娘（おやこ）、孫、三人の呼吸の音だけが、蔵に響いていた。

梅干し

「はぁ……。」

深い深いため息をつく。同調したようにトンビが鳴いた。ぴーよろろ。

このため息も、疲れも、イライラも、全部原因はお母さんにある。帰りたくないけど、帰らなかったら生きられないから、渋々帰るしかない。重い足を引きずって家に帰る。

「ただいま。」

声をかけたけど、誰もいない。唯一の家族のおばあちゃんとお母さんは二人とも農園に行っているからだ。手を洗って、制服からジャージに着替え、洗い物を出し、ふとちゃぶ台を見る。置き手紙と、お皿に乗った赤い丸いのが三つ四つ。

近づいてみるとメモには

『帰ったら食べて、農園に来なさい。様子を見て収穫しなさい。』

そしてお皿には蜂蜜漬けにした梅干しが乗っていた。でも、そんなの食べる気もしない。何も食べずに、収穫用のカゴだけ持って、家を出た。行かないと今夜のご飯は出てこないし、なんなら明日のお弁当も出てこないだろうから。それは困るから、行くしかない。また重い足を引き摺りながら、山道を登った。お母さんは、私が梅干しを食べないのにおやつにも、ご飯にも、弁当にも出してくる。知ってるのかどうか分からないけど、私は梅干しが大嫌いだ。小さい時から。残すと、ものすごく怒られる。おやつやご飯のは、なんとか誤魔化して食べたふりをして、捨てる。お弁当のは友達にあげる。それでも誤魔化しきれない時は強制的に食べさせられてきた。なぜそんなにして食べさせるのか、原因は、目の前の農園だ。渋川梅園。家は代々梅農家。そんなに大規模ではないが、この辺りの家の梅干しは、うちの梅干しのことが多い。

農園に入ると、渦中のお母さんとばったり会った。背中のかごにはもうすでにいっぱいの梅が入っている。

「遅かったじゃない。早くしなさい。日が暮れちゃう。」

何も言わずに梅の木の方に向かって歩いていく。思い出したように喋りかけてくる。

「あっそうそう。もう黄色いのもかなりあるから、全部取ってよね。青いのももうかなりいい具合だから……。」

声の届かない崖裏に行って、渋々梅の実をとる。プチンプチンと引っ張ってはかごに入れる。どれももうすでに熟れている。無心でもぎっていると、ぐにゅ、という感触が伝わってきた。恐る恐る見てみると、毛虫が身を食べていた。辺り一体聞こえる大きい声で悲鳴をあげて、地面に落とす。そして足早に家に帰る。

「もうっ！　ほんっとに嫌！」

泣きそうになりながら家に帰り、念入りに手を洗い、風呂を沸かして入った。身体に虫が付いてるように感じて、ゴシゴシと強く洗った。居間に入ると、夕食の支度がされていた。

「ご飯です。」
言われて畳の上に座った。去年の梅干しはもうそろそろ切れる。うちは女三人暮らしだから、作った梅干しはほとんど他所様に売ったり、あげたりしている。だからきっかり一年分しかない。この梅の取れる季節だけ食卓に出る梅干しは少ない。今日も梅干しは出ていなかった。安堵して、味を感じる前におかずやご飯をかっこむ。ものの十数分で食べ終わると、さっさと自室に行こうとする。しかしお母さんは見逃さない。
「花恵(はなえ)、来なさい。」
絶対に行くもんか。無視しようと思ったが、怒られるのも嫌だから、出入り口から振り返って、何。と言う。
「諦めたんでしょうね、大学。」
はぁ……。帰宅する時よりも大きなため息をつく。お母さんと仲が悪いのは、お母さんのせいでイライラするのは、これだ。大学に行きたい、行かせない。最近は毎日これだ。
「だから、何回も言ってるじゃん。諦めたりなんか絶対しないから。私は絶対に大学に行く。」
そう、私は大学進学を希望している。小さい時から、ここから逃げたくてたまらなかった。でも高校以上の進学先は無いと思っていたから、諦めていた。でも、大学という手があるのだと知ったのは、高校に入った時。一年の時から、隣の大阪の大学を目指して密かに勉強していた。隣の隣に住む、一歳上の健(けん)くんに教わって先に授業の予習をしていたから、高校の成績はまあまあ良く、このままいけば奨学金を取っての大学進学も可能だと、学校の先生も言ってくれた。面談の時にはお母さんにも言ってくれた。でもお母さんは真顔で突っぱねた。
『うちの家業を継がせるので、進学は全くなしでお願いします。』と。
さすがの先生も、困った顔をして、
『そ、そうですか…』と言った。
今の時代、大半の人が高卒で働く。確かに、クラスの半分くらいの人は就職するためにいろんな説明会に行っ

てたりする。でも、私は大学に行きたい。勉強したいこともしっかりある。

なのに、納得しない。おばあちゃんも、何も言わないけれど、私を見る目で言いたいことがわかる。『どうせ大学なんて行かないよな。』と。

イライラをぶつけたくて自室にこもり、参考書を開く。問題を解いてる時、大学に行くためにやっていると思うと、イライラは消え、ワクワクが生まれる。そうやっていつも、イライラしたら必ず難しい問題に向き合っていた。

あっという間に季節は変わり、冬になった。結局手伝ったのは梅の収穫だけで、毎年隣人が手伝ってくれる梅干し漬けには参加しなかった。九月には、じっくり漬け込んで酸っぱくなった赤い梅干しは、

『一九七〇渋川梅園の美味しい梅干し』

と、書かれたラベルの瓶いっぱいに詰められて、隣人や町の販売所に散っていった。その間に、私と母は何度も喧嘩をし、もうほとんど会話をしなくなっていた。でも私は一向に意志を変えず、勉強に精を出した。お月見も、豊穣祭も、クリスマスも、正月も、ずっと勉強していた。

そして、一月の後半。受験勉強も過去問の解き直しくらいまで終わった頃だった。暖房のない自室は、とても寒い。カイロや湯たんぽでも限界があり、風邪になってしまった。でも、勉強を休んだら元も子もないと思い、咳き込みながら勉強をしていた。すると突然、こつり、と音がして扉の前に何かが置かれた。ドアを開けると、そこにはおにぎりが二つ。しかも、みかんの汁で炊いたご飯のおにぎりだった。家の庭にある小さなみかんの木。寒いけど、日当たりがいいからよく育つ。小さい頃、風邪を引いた時、何も食べられず泣いていた時に、お母さんはみかんの汁を入れて炊いたみかんおにぎりを作ってくれた。中には蜂蜜漬けの甘い梅干しが入っていて、その時だけは嫌いなはずの梅干しを何個も食べてた。その時の優しくて嬉しそうなお母さんの顔を思い出し、急に泣きそうになって慌てておにぎりを食(は)む。ほんのりみかん色のご飯からは、ほんのりみかんの酸っぱさが香り、甘い蜂蜜漬けの梅干しとよく合う。優しく柔らかく握られ、ほろほろと崩れていくお米を

噛むほどに、涙が溢れてくる。でも涙は出始めたら止まらなくて、ヒックヒックと泣いた。蜂蜜漬けの梅干しも、鼻水で味がかき消されたけど、味を感じるまで噛んで飲み込んだ。扉の向こう側でも、鼻を啜る音がして、涙を流しながら笑った。おにぎりに託されたメッセージを大切に噛み砕いて、一粒残さず全部食べた。間違いなく、私の人生で一番美味しいおにぎりだった。

そして、雪が降る中、受験のために大阪に出てきた。お母さんも、おばあちゃんもついてきて、門の前で言った。

「まあ、お腹壊してそそくさ退場しないようにだけ気をつけなさいよ。」

と、お母さん。

「きっとお天道様が見てるで。気ぃ張って行かんと、天罰下るでな。」

と、おばあちゃん。

相変わらずそっけない二人に力強く

「うん。ありがとう。行ってきます。」

と、告げ、会場に向かった。手にした鞄には、梅干しのおにぎりだけが二つ入っていた。

コメ

俺は昔からいつもひとりぼっちだった。母が出て行って、唯一の家族の父も出て行って、五歳でひとりぼっちになった。幼稚園でも小学校でも中学校でも友達はできず、一人だった。

でもいつも、頭を撫でてくれる人がいた。じいちゃん。父が出て行ってから、ばあちゃんと一緒に、俺を育ててくれたじいちゃん。コメ農家で、戦争の時代からこの辺り一帯の田んぼを管理してる、コメ農家のリーダー。身体の四、五倍もあるでっかい機械を一人で動かして何十面もの田んぼに苗を植え、雑草をとり、水を入れ、水を抜き、刈り取って、干して。そしてたっくさんのコメを作る。俺はじいちゃんが、この世で一番かっこい

い人だと思っている。そして俺の憧れでもある。
そしてじいちゃんみたいになりたくて、何度も手伝いたいと言ってもじいちゃんは中学を卒業するまで、頑に許してくれなかった。それで、やっとのことで中学を卒業した俺はこの春から晴れてコメ農家になったのだった。――
前のかごに三十キロ、後ろの改造リアカーに八十キロ、合計百十キロものコメを積んだ特製自転車を漕ぎながら、「何の苦行だこれは…」と独りごちる。
じいちゃんの背中を見て、コメ農家にはなったものの、まだできることが何もない。機械の免許はまだ持っていないし、見回りに行くための軽トラの免許も、まだ取れない。だからまずは、田植え稲刈り機械の免許を取るために、農協に通っている。その道すがら、毎月一定のコメを届ける契約をしているお宅にコメを置いてこいと言われたのだ。いっぺんに運ぶのは大変だからと、それぞれのお宅に配達する日にちを少しずつずらしてくれている。だから一日の量はまだこんなもんで済んでいるけど、ずらしてなかったらどうなってたことか。それに比べるとまだ甘い方なのかもなと思いながら、重い車体を発進させた。
「わざわざありがとうねぇ。」
と、お腹をぽっこり膨らませた谷田さんが言う。
「身重(みおも)だと、重いものは大変でね〜。ほんと助かってるのよ。はい、ジュースしかなくてごめんね〜。」
と、冷えたサイダーの缶をくれる。ありがたく頂戴し、次のお宅に向かう。
「いやぁ、助かるねぇ。こんな働き者の孫ちゃんがいて、穀造(こくぞう)さんも大助かりじゃねぇ。」
と、瀬名のじいちゃんが言う。
「ほぉんと。うちの孫ったら、なんだかカードゲームとか言ってダラダラしてばっかなのよぉ〜。はい。これお菓子。あと、アイスもあげる。」
と、瀬名のばあちゃんが、ポテチとクッキーと、ポッキンアイスをくれた。ありがたく頂戴して、ヒヤヒヤ

のうちにポッキンアイスをパキンと折る。カチコチだけど、すぐに溶けてシャリシャリになった食感を味わいながら、次のお宅へ。

「あ、北脇（きたわき）くん。ありがとね〜。ってこら！　カオル、裸足で外出ない！　ケンタ、ちゃんと服着なさい！」

子供たちを叱咤しながら出てきたのは三軒目の長沼さん。家の中には、パントリー（食料庫）があるのでそこにお米を収納していると、七男三女の子供たちの攻撃が飛んでくる。おもちゃの剣で太ももをブッ刺してくれてる男の子はカケル。手刀で「ウーワチャチャチャ！」と言いながら尻を叩いてくるのはハルキ。足元にハイハイで突っ込んでくるのはまだ赤ちゃんのユウナ……。

次から次へと飛んでくる攻撃に応戦しつつも収納し終えた俺は早急に帰る。

「また来てねー！」

長沼さんと、子供たちが言った。手を振りつつも、でっかいおもちゃがわりにされてる気がして苦笑いするしかない。

さて、とコメを配達し終え、軽くなった自転車で農協までかっ飛ばす。そして、夕方まで講義と演習をして、また来た道を帰る。田んぼに住み着くたくさんの生き物の声を聞きながら、家に帰る。

「おかえり。ご飯出来とるで、はようお食べ。」

ばあちゃんが言った。「うん」と返し、手を洗ってうがいをして、食卓に着く。ばあちゃんの美味い飯たちに合掌して、おかずをピカピカのコメと一緒に頬張る。これがたまらなく美味しい。世界で一番好きな食べ物。

「今日はどうだったんけ？　もう乗れるんか？」

ばあちゃんが興味津々で聞いてくる。

「いや、まだまだだよ。でもちょっとずつ乗れるようになってきた。すぐ免許とって、手伝うよ。」

「厳しくするけぇな。覚悟しとけ。」

と、じいちゃん。いつもこんな感じでクール。

「わかってるよ。首吊る覚悟で頑張るもん。」
と、言うと、顔を綻ばせて俺の頭を撫でる。
早く、このピカピカのコメを作りたくて、うずうずしている。そのためだって思えば、お相撲さん一人分くらいのコメを運ぶのも、去年まで大の苦手で、今も苦手な早起きも、全部ヘッチャラだった。
そしてようやく、俺のコメが出来上がった。
四月に一面だけじいちゃんに貸してもらって、手植えで植えた稲は、モサモサと大粒の実をつけて頭を垂れている。いよいよ、刈り取りが始まる。取りたての稲刈り機械の免許を使って、機械を動かす。農協での練習ではレプリカの稲だったからよかったけれど、もう失敗は許されない。そう思うと、手が震えて上手く操縦できない。いきなり、畦からの着土位置を間違えてしまった。一本だけ、稲が折れてしまった。その稲を見て、もっと震えが止まらなくなった。その時だった。
「晴ッ！」
と、大きなじいちゃんの声がした。機械の音に負けないくらいの、大きな声。
「下を向くな！　前を見ろ！　自信持って刈れぇ！」
その声と同時に、手伝いのおじちゃんが一気に機械を押し、田んぼに入れた。俺は真っ直ぐ前を見て、一直線に進んでいく。折り返してまた進む。こうして、一面の稲を刈り終えた。
刈り取った稲を見て、思わず泣いた。雨にも風にも、虫にも負けずに育ってきた稲。周りの仲間と、支え合いながら立派に生きた稲。
その晩は金色おにぎりだった。コメの籾殻をあえてあまり取らずに黄金色にして食べるのだ。俺がとったコメじゃないけど、じいちゃんが今年初めてとったコメ。今年一、美味かった。俺のコメも、こんなに美味しくなってるといいな。と思いながら、米粒を噛み締めた。
そして次の日、稲干しのために、田んぼに向かった。稲を干し終えると、昨日言い忘れた言葉を言った。

「俺も、この稲みたいに立派に生きる。たとえ難しいことがあっても。苦しいことがあっても。」
そして一礼。すぐに、別の田んぼへ向かう。まだまだ辺り一面を埋め尽くす金色の稲を見つめ、
「よし！　行くか！」
と、声を張った。すぐ横を通り過ぎた渡り鳥は、風に乗って遥か遠くの山めがけて飛んでいった。

おにぎり

もう、いやだ。学校も家も全部。もうこの世界からいなくなりたい。どうせ私なんかがいなくなったって、誰も気にしないし、悲しむこともない。一刻も早く、ここから抜け出したい、なのに。なのに、足についた鎖が、それを阻む。何度も逃げようとして、足首の皮が所々めくれてヒリヒリする。毎日毎日、私を逃げられなくしては痛めつける。肩やお腹、背中にはもう数えきれないほど痣ができて、消えない。おまけにご丁寧に服から出ないところに、何度もつけられる。バカな担任の教師は、私の話を全く信じず、それどころか嘘をつくなと怒られ恥をかかされた。今すぐ、ここに隕石が降ってこないか、ミサイルが落ちてこないか、どこかで両親が野垂れ死んでくれないだろうか、何度それを願っただろうか。でも神様は、私の願いなど耳に入れもせず、無視してくる。やっぱり、私なんかいなくなっても誰も何も思わないんだろう。

数十分後、酒に塗(まみ)れた父と母が帰ってきた。ものすごい臭いが玄関から押し寄せてくる。ドスドスと部屋に入ってくる。あぁ、今日もまたやられる。もう無心で背中を向ける。痛みに耐えるために、歯を食いしばる。いつもならここで衝撃と痛みがくる。でも今日は違った。私の目の前に立って、手を振り上げるとそのまま倒れ込んできて、ブオーといびきをかいて寝出した。口から漏れてくるアルコールの臭いを全身に浴び、尋常じゃない吐き気とめまいがした。二、三回えずいたけど、出てくるものは何もない。唯一私の胃に入る給食はもう消化されている。涙だけが出て止まらない。出てきた涙は一粒逃さず舌ですくう。貴重な塩分。足りなくなると死んじゃうって先生が言ってたこともあるけど、単純に口に入るものが何もないから。空腹を紛らわすため

だ。涙を舐めながら、自分が惨めで仕方がなくて、声を殺して大笑いした。涙を食べる物がわりにする、惨めさの度を超えて、もう笑うしかない。

ひとしきり泣き笑いした後、ゆっくり体を起こす。滲んでいた視界が晴れる。薄暗い中に、黒い影が横倒れている。ふと、それの手のあたりに光るものを見つけた。手を伸ばしてとってみると、鍵だった。それも、私の足の鎖用のものだ。心臓がドクンと唸った。頭から血が抜ける。チャンスだ。もうこれを逃したら、次はないだろう。鍵穴に挿すとあっけなく鎖は外れた。重たい鉄の塊が足から離れる。すぐに足を抜くと、部屋の外に出る。母は、リビングにいるのかテレビの音が聞こえてくる。ガスも水道も止められてるくせに電気だけは止められない。それをいいことに、払わないくせに電気を消費する。

悪態をついていると、リビングからギシッという音がした。しまった、ここでバレたならもう一生部屋から出られなくなる。忍び足で玄関に向かい、投げ捨てられていた母親のよれよれのTシャツだけを着て、外に出る。一目散にドアから離れる。一刻も早く、捕まる前にここを離れないといけない。一心不乱に走る。ザアザアと降る雨の中どこだか分からない道を走る。もうとっくにエネルギーなんか無くなってる。ものすごい走ったように思ったけど、まだマンションの灯りが見えて、顔から血が引けた。もっと走らなきゃ…そう思うのに、体が前に進まない。バランスを崩し側溝に落ちて転んだ。体中にものすごい痛みが走る。やっとのことで電柱に掴まったけど、もうそれっきり。足から、手から、全身から力が抜けていく。もう、終わる…。瞼が勝手に落ちていく。深い闇が、目の前に広がった。

——どこか遠くで、男女の声がする。

「ちょっ、こはなさん見てよ、……」

「うわ、ひ…ぃ。おーぃ……ぇる？」

「ねぇ！　見て、下……」

「……のかも。とにかく……ぃこう。」
それ以降、声は聞こえなくなった。――

――まどろみの中に、赤みを帯びた黄色の点が浮かんできた。どこ、ここは…。
やがて、だんだんと視界が晴れてきた。点は柔らかい光で、私を照らしていた。体中の痛みに耐えながら体を起こすと、そこは部屋で、自分は敷布団に寝ていた。見慣れない服を着せられている。手や足には綺麗に絆創膏が貼られている。一体誰が？　どういうこと？
壁に手を当てながら痛む足を引き摺って部屋を出ると、キッチンとテーブル、ソファーにテレビがある。と、急に明るくなって目をすぼめる。すると、女の人の声がした。
「あ、起きた？　大丈夫？　とりあえず座って。」
と、私をソファーに座らせる。
「びっくりしたよ、体中傷だらけの女の子がパンツにTシャツで倒れてるんだもん。」
「あ……」
あなたは誰ですか？そう言いたかったのに、口の中がカラカラで、それしか出ない。
「あぁ、とりあえず水飲みな。」
気づいた女の人がコップに水を注いで飲ませてくれた。一口飲むと、止まらなくて大きいグラス丸々一杯分を一気に飲んだ。
「ははっ、飲むねえ～。」
女の人はびっくりしたように笑った。
「あ、あの、誰ですか、なんで…」
遮るようにして言う。

「アタシはコハナ。小さい花と書いて小花。今は、ここでいろんな子供たちの面倒見てんだ。んで、道端に倒れてたあんた見て、なにかあったんだと思って。連れてきて風呂入れて、絆創膏貼って寝かせて、今に至るってワケ。っていうか、アンタ、名前は？」
「大坪柚美花…です。」
「そっか、柚美花ちゃんか。柚美花ちゃん、誰かになんかされた？　嫌なこととか、その…、色々…。」
小花さんは口ごもりながら聞いてくる。私が受けているものよりもっとひどいことをされたかどうか、聞いているのだ。
「いえ…違います……えっと……」
どう説明していいか答えあぐねていると、
「大丈夫、バカ男どもはもう寝たから、ここにはアタシとゆみっちしかいない。全部、話していいんだよ。秘密は守る。」
と、優しく言ってくれた。鼻がツンとして思わず俯く。水を飲んで湿った口から、ポロポロと言葉が出ていく。
「親に…両親に暴力されてて……酒に酔って帰ってきて…寝たから、逃げようと思って外に出て……走れなくなって……」
そこまで言ったところで、盛大にお腹が鳴った。小花さんは、ははっと笑った。
「そっか、そりゃお腹すいとるわな。待ってて、なんか作るから。」
台所に立ち、みかん…ねぇかぁ～などと言いながら、何かを作ってくれている。
「そっかそっか。辛かったな。でも、もう安心して。ゆみっちは絶対あたしが守る。たとえ、どんな怖いヤツが来てもね。」
言いながら、木箱からアルミ缶を取り出し、その中から海苔を出す。白いご飯を握って、

『二〇三〇渋川梅園の美味しい梅干し』
と書かれた瓶から梅干しを取り出してご飯に入れた。それをそのまま、渡してくる。
「ハイ。いっぱい食べな。」と。
受け取ると、それはすっごく重たくて、海苔のいい匂いがした。かじると梅干しの香りがして、またお腹が鳴った。バクバクと貪るように食べた。あっという間に食べ終わると、また小花さんは驚いたように笑っていた。
「ははっ。そんなにかぁ〜。よく耐えたね。」
頭を撫でてくれる。こんなに優しくされた記憶はもうなくって、鼻がツンとした。でも涙は出なくって、代わりに眠気が襲ってきた。そしてあっという間にそのまま寝てしまった。
「だぁれ？　このひと。」
「わかんねー。しんでるかもよ。」
「きゃー。いやー。」
ドタドタと音がして目が覚めた。
「うわぁ、幽霊が起きたー！」
またドタドタと音がした。寝起きで頭が働かなくてなにがなんだかわからずにいると、
「お、起きたかー。って、ごめんねーガキどもが。まあ、まだガキだから許してやって。」
と、小花さんの声がした。
「あ、そうだ。まあ一応、ずっとここにいるのはいいんだけどさ、ちょっと手伝ってもらうこととかあるかもしんないけど、よろしくな。」
「はぁ…」
「あぁ、重労働とかじゃないし、辛かったら全然やらなくてもいいよ。けど、バカどもがバカだから、役に立

たなくってねー。」
　ははは と笑う。すると奥の部屋から声が聞こえた。
「おい。誰がバカだって？」
「さぁ、誰かしら。」
「このやろー。せっかく山梨まで行って、コメ担いで来てやってんのにー。」
「体力だけが取り柄なんだから、あったりまえでしょ。」
「うるせー…。」
　小花さんは部屋から出てきた男の人とわんやわんやと言い合った。
「ごめんねー。こいつは北脇。一緒に子供達の世話してるんだ。モジャモジャ頭だけど悪いやつじゃないからさ。いやだったら放り出すから、じゃんじゃん言って。」
「おいこのやろー。」
「なんだとこのやろー。」
　わいわいとまた始まる。あぁ、これが平和な朝か。殴られることもなく、鎖に繋がれることもない朝。数年ぶりに、朝が気持ちいいと思った。
　私に任された手伝いは、子供たちの世話。主に食事の世話をする。小さい子を世話するのは好きだ。疲れるけど、楽しい。
「ゆみっち〜、ブロッコリー嫌だ〜。」
「え〜美味しいよ〜。ほら。」
　と美味しそうに食べてみせる。でもほんとに美味しい。私を真似て、七歳になったばかりの楠千鶴（ちづる）はブロッコリーをかじる。
「ほんとだ！　美味しい！」

「でしょ？」
「ゆみっちパーンチ！」
ドスっと、背中にパンチの衝撃がくる。
「このやろー！　ちゃんと座って食べなさーい！」
「ぎゃーっ！」
追いかけっこが始まる。すぐに観念した千鶴の双子の弟、楠龍之介（りゅうのすけ）は席についてむしゃむしゃとパンを食べる。
平和な日常。幸せな日常。とても幸せだと思った。つい一ヶ月前まで、この世から去ろうと思っていた私が、ここまで変わるなんて。私も予想できなかった。
この家にきて三ヶ月が経とうとした時、突然警察の人から電話がかかってきた。父と母が私の行方不明者届を出したらしい。警察の人は、私の居場所をすぐに突き止めた。小花さんの勧めで、警察に行き、事情を話した。そして、私があの人たちと縁を切りたいと言うことも。すると、あっさりと受け止めてくれた。でも条件があった。
『親に一度会ってそのことを言わなければならない』ということだった。そんなこと言えば良いだけ、と思った。最初は。でも実際に会わなきゃいけない。もう二度と顔を見たくないのに、見なきゃいけない。そこで踏みとどまってしまった。
家に帰り考えていると、急にものすごく怖くなった。もう居場所がバレているのではないか。今急に襲って来ないだろうか。考えれば考えるほど怖くなっていった。気づけば、会いにいくと決めた日の前日になっていた。恐怖のあまり、二、三度トイレで吐いてしまった。小花さんは、何も言わなかったけど、ずっと背中をさすってくれた。自分のことは、自分で終わらせるんだ。警察に行った日、小花さんは私にそう言った。ほんとはものすごく怖くて、関わってくれない小花さんにイライラした時もあった。けどそれのおかげで私は怯まず

立ち向かうことができた。

迎えた当日。顔を洗い、髪を結って、服装を整えた。ずっとどきどきしていたけど、怖いと思うことはなかった。支度を終えて、リビングに行くと、小花さんが朝食の支度をしていた。

「今日は柚美花の大事な日だから、とびきり元気になるやつな。」

と言って、ぎゅっころぎゅっころおにぎりを握る。ここにきた時と同じように、木箱の中のアルミ缶から海苔を出し、半分に切る。ご飯を握って、『二〇三〇渋川梅園の美味しい梅干し』と書かれたラベルの瓶から梅干しを出し、ご飯に埋(うず)める。形を整えて海苔を巻いて、渡してくれる。受け取って、驚いた。ご飯がオレンジ色に染まっていた。初めて見るおにぎりに驚いていると小花さんは独り言のように言った。

「そいつはみかんおにぎり。あたしもよくお母さんに作ってもらった。でもこれはちょっと違う。百年前に作られた美味しい海苔と、あのモジャモジャの北脇が作った金色のコメと、あたしのお母さんが作った梅干しとみかんを使って作った世界一最強のおにぎりだ。世界に一個しかない。柚美花だけのおにぎり。これを食べれば、もう大丈夫。きっとうまくいく。だから……」

振り返って、私を見て、言う。

「行ってこい！」

ははっと笑う。

おにぎりをかじると、梅干しの酸っぱい香りと、海苔の香ばしい匂い、プチプチとしたお米からはほんのりみかんの香りがする。

世界最強のおにぎり。私だけのおにぎり。

オレンジのおにぎり。

あっという間に平らげて、小花さんに、しっかりと、力強く言う。

「うん。ありがとう。行ってきます。」

玄関を開けると、澄んだ空気が通り抜ける。強い太陽の日差しは、私の行く先を煌々と照らしている。
「よしっ。」
セミに負けないくらいの私の声は、爽やかな夏晴れの空に吸い込まれていった。